

漁場利用をめぐる文献史学からのアプローチ

—末田智樹報告・服部亜由未報告によせて—

東 幸 代

「海からの歴史地理」と聞くと、1980年代以降の文化地理学的・生態学的な地域漁業研究¹⁾が想起される。日本史研究でも、日本を海からの視点でとらえ直そうという動きは、網野善彦氏の著作²⁾などにみられるが、このころ、日本近世漁業史研究は、二野瓶徳夫氏が提示したいわゆる「総百姓共有漁場」説³⁾の克服に向けて議論を開始したところであった⁴⁾。

日本の漁業史研究にとって、漁業権、およびそれが行使される漁場は重要な研究対象であり続けている。二野氏以降の近世漁業史研究は、特に1990年代以降、村と漁場との関係に焦点をあて、漁村史研究として社会経済史的実証を重ねてきた⁵⁾。また、近代漁業史研究においては、明治政府や各府県による漁業制度の再編・変革について検討をくわえる漁政史的観点からの研究がおこなわれている⁶⁾。それらの分析の中心は、地先漁場であり、この表現からもうかがえるように、使用される史料は、陸から海にまなごしを向ける人々によって作成されたものである。研究者らも視点を重ね合わせ、同じく「陸から」の視点で海をみてきたといえよう。

漁民による漁場利用の実態解明を重視し、村と漁場との関係を検討する近年の近世漁村史研究と、捕鯨業や鯨漁における漁場の研究とが、課題を共有することはほとんどなかった。戦前から戦後にかけて漁業史や産業史の視点からおこなわれた捕鯨史研究⁷⁾は、近年では産業経営体たる鯨組の経営分析などで成

果をあげている⁸⁾が、使用史料の中心は鯨組関係のものである。そこでは、鯨組の出漁を受け入れる幕藩領主層の経済的利益は追求されていても、移動する鯨組を受け入れる村、もしくは地域社会の姿にそれほどの注意が払われてきたとはいいがたい。また、鯨漁については、流通史的観点のほかに、場所請負制の制度史的観点からの研究がおこなわれてきた⁹⁾。とりわけ、場所請負人のあり方が研究の中心を占めており、雇漁夫など移動する漁民については、同問題の一環として処理され、直接把握されてこなかった。幕末の段階で、場所が「漁村」へと変貌し、「場所共同体」が成立しつつあり、それを前提に構成員の生活史を含めた社会構造を明らかにすべきだという指摘もある¹⁰⁾が、史料制約もあり、実際の検討は困難であった。近代における鯨漁の研究では、近世段階とは異なり、出稼ぎ漁民研究が進展し、移動する漁民自体に関心が向けられている¹¹⁾が、いずれにせよ課題を異にしていた。

以上のように研究史を概観すると、外部からの漁民の入漁を前提とする捕鯨業と鯨漁の研究は、「海から」漁業をとらえてきたといえるかもしれない。人の移動が前提となるこれらの漁業は、海から「近世～近代における漁場利用の変化と人々の移動」をとらえようとする今大会のテーマにふさわしい選択といえる。末田氏はこれまで、巨大鯨組が他領の漁場へ積極的に出漁している状況を明らかにしている¹²⁾が、こうした他領出漁の研究は、

経営史的研究と同様に、移動する側にあたる鯨組の史料を用いておこなわれてきた。これに対して、今大会での末田報告は、出漁を受け入れる長州北浦地域側の漁村・領主との諸関係にも焦点があてられる。いわば、「海から」の視点と「陸から」の視点とが交差する場として、捕鯨漁場が設定されているのである。捕鯨は、広域漁場と多くの労働力を要し、造船、操船、捕獲などの技術面の伝播をもたらすのみならず、受け入れ側の従来の漁場利用秩序にも大きく影響を与えていると想定される。実際、西海地域には、それを示唆する関連史料が残されているという¹³⁾。いずれの地域にせよ、受け入れ側の論理の解明は、村と漁場との関係を検討対象としてきた漁村史研究との対話が可能になるという点で、近世漁業史研究において重要な研究課題であると改めて考えさせられる。

ただ、近年の諸研究をみると、報告で検討されている19世紀の海は、漁場という以上の意味が付与されているようにも思われる。西海地域や長州地域の捕鯨は、捕鯨業といえる規模を有するが、「業」とは呼べない小規模な捕鯨地域もある。そうした地域でも、19世紀の丹後宮津藩のように、領主権力が捕鯨漁場に強く関与し始めることがわかる。また、捕鯨未経験の若狭小浜藩で、紀州藩から漁師を招き、藩役人がその調練を見学するという記録が見られたり、出雲松江藩では、新規に捕鯨を開始し、隣藩にあたる鳥取藩の漁場を侵犯したということで問題になっていたりする¹⁴⁾。このような地域での捕鯨の開始は、経済的利益のみが目的なのか。さらに、当該期には、海防のために捕鯨業を利用しようという主張が、仙台藩でみられる¹⁵⁾。このように、19世紀の捕鯨には、領主権力の関与が色濃いのである。捕鯨のもつ権力性や、幕藩領主層の外交的緊張が高まる19世紀の捕鯨漁場の変化を考える場合、経済と軍事の両側面を合わせ、当該期の海をとらえ返す必要

があるように思われるのである。

海をとらえ返し、海から漁業史を考えることは、別の観点からも現代を生きる我々に求められている。海洋回遊資源が変動した際に地域社会が受ける影響についての研究が、注目されているのである。日本近世史では、歴史学研究会近世史部会が2017年大会のテーマとして「日本近世の自然資源と政治・社会」を掲げ、漁業¹⁶⁾と林業に関する報告がなされた。また、近世・近代漁業史研究においても、資源変動と自然資源利用の変遷について検討がおこなわれている¹⁷⁾。これらの研究と、浮魚資源の変動と漁業者の移動との連関を解明する服部報告は、問題意識を共有しているといえよう。

無論、従来の研究が資源変動とそれにとまなう人の移動に無関心だったわけではなく、歴史地理学には、特に鯛の資源変動に関する研究で蓄積がある¹⁸⁾。人の移動に関しても、遠隔地への出漁形態や沿岸地域の集落形成、人口動態などについて検討がなされている。しかし、服部氏の研究は、こうした統計数値として処理されがちな漁民の動向の解析にとどまらず、漁民個々のライフ・ヒストリーに踏み込んで不漁対応を解明している点に特徴がある。今大会における報告は、前稿¹⁹⁾で検討している中規模鯨漁家の不漁対応をも組み込み、当該期の不漁対応について、複眼的に検討を加えるものであった。

史料の制約からサンプル数は少ないとはいえ、漁民が自らの判断で漁況を見極め、漁場間を移動したり漁獲対象魚種を組み合わせたりしている様相からは、ある特定魚種の漁況変動に翻弄されるだけではない漁民の姿が浮かび上がる。こうした近代の漁民の姿、すなわち、ある種の複合的な生業の場として海をとらえる視点を獲得している漁民像が集団として一般化できるのか、また、特に場所請負制が崩壊する近世から近代への経過のなかで、いつ、いかなる契機で登場するのか、な

どを知りたいところである。

服部氏の、不漁期における対応に盛衰の差があらわれるという観点からの研究は、上記のように興味深い漁業社会像を浮かび上がらせており、おおいに学ぶべきであるが、あわせて考えさせられたことがある。前述のように、環境問題や環境史研究の隆盛をうけ、日本史学においても資源変動と社会との関係についての研究が見られるが、その多くが、不漁のような資源の枯渇を問題としている点である。漁業史研究の場合、従来の研究が、社会の発展とそれを支えた豊漁という観点からおこなわれてきたことへのアンチテーゼといえよう。その意味では、やっとな漁が検討対象になったといってもよいかもしれない。しかし、豊・不漁というのは、特に統計数値で把握できない前近代では相対的なものであり、実際には、規模の大小を問わず、資源量は変動している。また、森林資源等とは異なり、浮魚のような水産資源は増加にせよ減少にせよ、ある日突然大きく変動するという特質がある。筆者は、かつて、日本海側での19世紀の鯛の豊漁が、丹後宮津藩役人の間に漁業に関する議論を引き起こし、その結果、漁獲物流通構造に変化が起こったことを論じたことがある²⁰⁾。豊漁と不漁のいずれが、社会的影響がより大きいかを問うことは意味がないように思われるが、豊漁の場合、漁民の活動増強のみならず、水産資源が迅速処理を要する商品であるという性格から、流通構造等にも即応的な変化が起こる可能性がある。社会の変化を大きくとらえようとするならば、豊・不漁のいずれかではなく、資源変動という大きな枠組みのもとで、水産資源に目を向ける必要がある。もっとも、近代の水産資源について考える場合、加工や保存技術等の進歩、繁殖や管理という新しい要素を組み込む必要がある。しかし、少なくとも人工繁殖が課題となっていなかった鯨漁の場合、その不漁を補うかたちで他の漁業が組み合わさ

れているという事実を前にすると、漁民の移動から漁業をみるという立場は、種々の漁業の豊・不漁をとともに視野に入れながら漁業社会の変化を注意深く捉えることができるという利点があるように思われる。

改めて、「近世～近代における漁場利用の変化と人々の移動」に注目する両報告に学んだ点を整理すると、以下ようになる。

(1) 漁民の移動にともなって起こる、受け入れ先の対応や変化の解明の重要性を示したこと。

(2) 漁獲対象となる水産資源の増加と減少とを、ともに射程にいれて議論できる可能性を示したこと。

(3) 漁民の人間個人としての側面と、集団としての側面を同時に照射し、主体的漁民像を示したこと。

両報告とも、分析の手堅さとあいまって、示唆的で興味深いものであった。自らの今後の研究にいかしたいものである。

(滋賀県立大学)

〔注〕

- 1) 田和正和『漁場利用の生態』九州大学出版会、1997ほか。
- 2) 網野善彦『中世再考—列島の地域と社会』講談社、1986ほか。
- 3) 二野瓶徳夫『漁業構造の史的展開』御茶の水書房、1962。
- 4) 定兼 学「近世漁場利用体系試論—備前国日生沖漁業相論を事例として「村」における—」瀬戸内海地域史研究2、1989、197-230頁。のち、定兼『近世の生活文化史—地域の諸問題』清文堂出版、1999、334-364頁。
- 5) 伊藤康宏『地域漁業史の研究—海洋資源の利用と管理』農山漁村文化協会、1992。高橋美貴『近世漁業社会史の研究—近代前期漁業政策の展開と成り立ち』清文堂出版、1995。後藤雅知『近世漁業社会構造の研究』山川出版社、2001。橋村 修『漁場利用の社会史—近世西南九州における水産資源の捕採とテリトリー』人文書院、2009ほか。

- 6) 青塚繁志『日本漁業法史』北斗書房, 2000
ほか。
- 7) 羽原又吉『日本漁業経済史』(上巻・中巻
2・下巻)岩波書店, 1952・54・55ほか。
- 8) 末田智樹『藩際捕鯨業の展開—西海捕鯨と
益富組—』御茶の水書房, 2004ほか。
- 9) 白山友正『松前蝦夷地場所請負制度成立過
程の研究』北海道経済史研究所, 1961ほか。
- 10) 田島佳也『近世北海道漁業と海産物流通』
清文堂出版, 2014。
- 11) 服部亜由未「明治・大正期における北海道
鯨漁出稼ぎ漁夫の動向—菊池久太郎の出稼
ぎ記録より—」歴史地理学49-5, 2007, 54-
68頁ほか。
- 12) 末田智樹「西海捕鯨業地域における益富又
左衛門組の拡大過程」(神奈川大学国際常民
文化研究機構『国際常民文化研究叢書2—
日本列島周辺海域における水産史に関する
総合的研究—』, 2013), 117-131頁ほか。
- 13) 森 弘子・宮崎克則「西南学院大学博物館
寄託『松澤善裕氏所蔵文書』に見る鯨組と
地域漁業の軋轢—平戸藩生月島の『御崎大
納屋』から大島(的山大島)への書状—」西
南学院大学博物館研究紀要2, 2014, 9-14
頁。
- 14) 東 幸代「近世の鯨と幕藩領主—丹後伊根
浦の捕鯨を手がかりとして—」史林100-1,
2017, 74-105頁。
- 15) 高橋美貴・落合 功・荻慎一郎「近世の漁
業・塩業・鉱業」(『岩波講座 日本歴史』
13, 2015), 145-165頁。
- 16) 中村只吾報告「漁村秩序の近世的特質と自
然資源・環境」。のち, 中村「漁村秩序の近
世的特質と自然資源・環境」歴史学研究
963, 2017, 88-97頁。
- 17) 高橋美貴『近世・近代の水産資源と生業—
保全と繁殖の時代—』吉川弘文館, 2013ほ
か。
- 18) 菊地利夫「九十九里浜イワシ漁業の豊凶交
替と新田・納屋集落の成立との関係」新地
理7-2, 1958, 84-92頁。古田悦造『近世魚
肥流通の地域的展開』古今書院, 1996ほか。
- 19) 服部亜由未「大正・昭和初期の鯨漁業の衰
退にともなう漁家経営の変容—北海道高島
郡南家を事例に—」人文地理63-4, 2011,
1-21頁。
- 20) 東 幸代「丹後宮津藩政と漁獲物流通—近
世後期の魚肥問題を中心に—」(後藤雅知・
吉田伸之編『水産の社会史』山川出版社,
2002), 112-145頁。